

大塚敬節
責任編集
矢数道明

世漢方医学書集成

107

目黒道琢

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

世近漢方医学書集成 107 目黒道塚

第Ⅳ期
全16巻

昭和五十八年十一月二十五日 発行

編者 大塚敬節

矢数道明

発行者 中村安孝

発行者 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ木ノ五
電話東京(八二五)一二七〇番代
振替口座 東京七一〇七四九番

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫



目黒道琢肖像(目黒元作氏所藏)

凡 例

一、本書第一〇七卷「目黒道琢」には、『餐英館療治雑話』『驪家医言』(京大富士川本)『驪家医言』(東大鶚軒本)『驪家医言抄書』を収録した。

一、本書は全て影印版によったが、影印にあたっては次のようにした。
イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは全てそのままにした。

ホ、印刷不明な箇所は、補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

『餐英館療治雑話』 写本三卷三冊(大塚恭男氏所蔵)

『驪家医言』 写本 一卷一冊(京都大学医学図書館富士川文庫所蔵)

『驪家医言』 写本 不分卷一冊(東京大学総合図書館鶚軒文庫所蔵)

『驪家医言抄書』 写本 不分卷一冊(武田科学振興財団杏雨書屋所蔵本)

一、解説は小曽戸 洋(北里研究所附属東洋医学総合研究所)が執筆した。

目黒道琢

小曾 戸 洋

一、はじめに

近世日本医学における考証学派の高度な学問的業績は、日本が世界に誇るべき文化遺産であるといつて過言ではあるまいと考える。目黒道琢（驪恕公）はこの医学における考証学派を興した最重要人物である。

だが、それにもかかわらず、目黒道琢の事蹟については、これまで全くといつてよいほど明らかにされていなかった。すなわち、富士川游『日本医学史』にはその名前の片鱗すら載せられてはいない。



図1 目黒道琢肖像

その名の一端を今日の漢方界に知らしめたのは、矢数道明『臨床応用漢方処方解説』⁽¹⁾であり、それはそこにしばしば引用される『餐英館療治雑話』の臨床的著述をもつての故である。

一般に知られる目黒道琢の伝記は、浅田宗伯『皇国名医伝統編』⁽²⁾の記載——

延訓^テ督諸生^ヲ 館躋^{リテ}為^ニ国学^ト 幕府仍命^ニ為^ニ助教^ト 凡居^ニ教職^ニ者皆医官而尚忠^ニ以^ニ布衣^ト 与焉益^々
特典也尚忠初仕^ニ大番頭青木氏^ニ 後仕^ニ白河侯^ニ 皆辞去^シ 寛政十年 恭廟召見^ル 是年卒^ス 門人有^ニ鈴木素行^一 飯溪著有^ニ霊枢箋^一 非非十四経弁。随筆等^一

の数行が唯一のものである。

筆者はかつて江戸後期考証医家についての概略を論じたことがあるが、ひとりこの目黒道琢に⁽³⁾関しては、ほとんど言及することができなかった。それは余りに遺著や事蹟に関する資料が乏しかったからである。

このように幕末考証学派の礎^{いしず}を築き、また現代の漢方臨床に寄与した目黒道琢の事蹟を発掘す

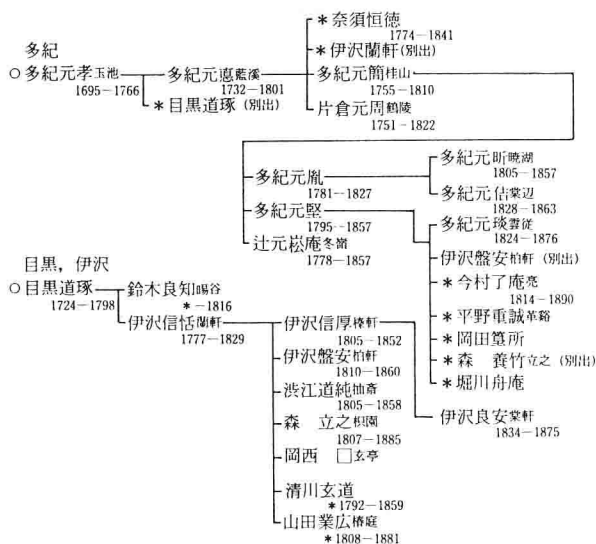


図2 医家考証学派系統図⁽⁵⁾

ることは、先哲の業績を継承する者にとって今なきなければならぬ仕事の一つであると考え探索した結果、はからずもいくつかの資料を得ることができた。その経緯については既に雑文を草⁽⁴⁾したが、このたび本叢書「近世漢方医学書集成」第四期に目黒道琢がとり上げられ、

『餐英館療治雑話』『驪家医言』の二書が収録されてその名が不朽のものとなるに至ったことは、まことに喜びに堪えない。

よってここに先の資料に基づき、さらに新知見を交えて目黒道琢の事蹟の一端をまとめてみることにする。

二、目黒道琢略伝

——墓碑および家系図——

森潤三郎『多紀氏の事蹟』⁽⁶⁾の中に、多紀氏の交友の一人として目黒道琢が挙げられ、その墳墓が「牛込市谷月桂寺」に存在する



図3 月桂寺目黒道塚墓碑の外観

した。その墓碑の写真を図3に、またこのたび新たに採取した碑文の拓影を図5に掲げる。

過去帳については、寺側に問い合わせたところ現在不明とのことであったが、後日、幸い会津柳津町教育委員会教育長、内田伊佐雄氏より、十数年前に月桂寺にて撮影したという過去帳の写真の提供を受けることができた。それを図4に示す。

目黒道塚の墓石は、月桂寺の中でもひとときわ目立つ大きなものである。表面には「飯溪目黒先生墓」と刻され、両横背三面にびっしり彫られた八七七字の碑文は、考証学派の巨頭、多紀元簡の撰に係る。この碑文は目黒道塚の事蹟を実に要領よく伝える元簡ならではの名文である。原文は18頁の図5に示す通りであるし、訓読は既に試みたので、ここでは現代文に改め紹介すること

ことが明記されている。現在地名、新宿区河田町三丁目（フジテレビ・東京女子医大の前）にある月桂寺（臨済宗）がそれで、柳沢吉保などの名墓も残る大きな由緒ある寺である。寺院の建物は鍾樓を除いて昭和十九年に戦災によって焼失したため、鉄筋コンクリートで再建されたが、調査の結果、目黒道塚の墳墓は今日も建立当時のまま存在することが判明

にしたい。

多紀元簡撰の墓碑文

先生は諱を尚忠、字を恕公、あるいは道琢と称し、飯溪と号した。姓は目黒氏で、奥州会津の人である。

若くして江戸に出て、医術を行った。当時、江戸の一富商で発狂して数年に及び、種々の医療を受けても効果がない者がおり、先生に治療が請われるに至ったことがある。先生は「治癒せしめること可能である」と言って、患者の家族に命じ、大きな桶に水を入れ、底に近い部分に穴をあけ、高い所に置き、寛（とひ）で水を通して、飯の滝を作らせた。そしてその下に患者を坐らせ、水を浴びせること十数日。果たせるや全治して、その後二度と再発することはなかった。このことは江戸中のうわさとなり、人々は先生を扁鵲の生まれかわりと評したほどである。先生の

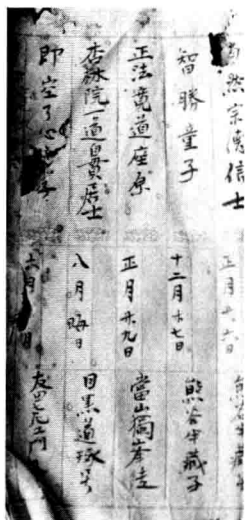


図4 月桂寺過去帳の
目黒道琢の部分
(内田伊佐雄氏提供)

治療はしばしばこのような奇効を奏した。先生の学究姿勢は実に熱心そのもので、その勤勉ぶりは老いても衰えることはなかった。典籍類はことごとく奥義を究めたが、とりわけ校勘学には卓越し、『素問』『靈樞』『難經』『傷寒論』『金匱要

飯溪目黑先生墓

先生諱為忠字恕公一字道琢飯溪姓目黑氏與非命津人也弱冠來東都以醫術稱時都下一富商幾狂數年舉療無驗延先生請理為先生曰可理矣乃命其家人巨桶盛水穴其底底之度置之於高以匱水盆假瀑奔坐惠者甘下而受水者凡十數日性理全治其後不復發郁下與傳以為扁鵲復生矣其奏奇効往如以先生於學學說自前朝而不倦誠素蘭室之書靡不盡究其真矣家長於授響素靈難經傷寒金匱其外洎理療之諸書行間上下莫有白處明和二年乙酉歲吾王父玉池君申於公府而創醫學倡集四方醫士乃請當時博學廣通老成方術者而訓誘習課焉先生以學富術精亦與在請中矣寬政三年辛辰歲官命吾父大醫正今藍溪若教有官醫子弟自此麻後選官醫有學識者充醫學教授先生獨以市井之醫補員教授歲終賜白銀以獎異之先生從醫學之創建出而譚鑒經者前後三十有四幸無有虛歲矣同十年戊午六月奉

图 5 — A 目黑道琢墓碑文拓影

謁大君每月朔望詣殿廷隨從鵠行拜壽而還惜哉其歲嬰病而歿實八月晦日也按回黑氏系自畠山重忠之弟重行居勢州目黑鄉因以爲氏後渡奥州依佐原義連其後數世生草稱若狹居會津野老澤以名家之孫官一邑事子孫也嚴職不死父伊左衛門有男二人先生居其二馬生而岐其甫三歲稱非父字兒旁自聚麻子排作算子而習丸章術人回目爲神童既冠憤然自奮曰吾烏麻同野農村民事鋤力作子龍訖而老矣於下邑僻壤之間我道衰足據重來于東都師事典藥頭今大監西岡公而肆鑒傳其秘旨故從大番帥青山公下幾辭去將學四方觀光上國再歸僑居都下術益精學益富計理甚精可爲影者行此其一時名人絕士多從之游其行事白河侯春遇甚渥先生性直實劉令文不勝實意所不可面折不置寬政紀元年爲開東補佐居執政之上同三年先生還樸不復仕焉平生著素靈難經傷寒金匱各有注辭及滄筆若干卷要加藤氏生三男三女長曰三郎早歿次曰遵養藤父業爲醫次曰自琢出嗣官醫吉田氏長女季仕松江侯後宮仲嫁官醫酒田氏季嫁官醫杉枝氏願言曰婦壘累人無益死者庶吾死則幸于此矣於是死之明年月定於市谷月桂寺之後以余之相識兼舊託銘其墓因至以辭云

斯姓之後遷于東與五百平閑于潛于伏爰及先生其興自躬古風爲繼且實爲東涉軒轅書究梨山術救民沈痾起人淹疾教授于館白銀賜賞薦剡已達奏謁于上魄竈黃泉名并人間厥子厥孫視此勿懈

京都法眼侍醫尚筆無墨學事 丹波元簡識 京都盛軒行言

圖 5 - B 目黑道琢墓碑文拓影

略』のほか、治療書に及ぶまで、書物の行間・上下余白にくまなく書き込みがしてあって、白い部分は寸分も残されていないほどだった。

明和二年（一七六五）、私の祖父である多紀元孝は、幕府に申請して医学館を創建し、諸方から広く医学生を募り、かつ当時の博学にして医術に熟達した人々を講師に迎えて学生教育指導を行うこととなった。このとき、先生は学問に秀で、医術に熟練していたので、講師陣の一人として招かれたのである。寛政三年（二七九一）、幕府は私の父、多紀元恵を大医院に命じ、官医の子弟教育の任にあてることとなった。これより後、医学館の教授は、官医のうちから学識優秀なものが選抜されるのが原則となったが、先生はひとり市井の医者身分で教授に補員され、年末には奨賞として白銀を賜与された。このようなことは全く破格のことであった。

先生は医学館の創建時から医経を講義すること三十四年間。一年として休講したことはない。寛政十年（一七九八）六月、大君徳川家斉に奉謁し、毎月一日には殿廷に望詣し、高官吏の行列に加わって拝礼して退出した。しかし惜しいことに同年、病没された。八月末日のことであった。考えるに、目黒氏は畠山重忠の弟、畠山重行を祖先とするものである。勢州の目黒郷に住居したから、これを師としたのである。後に奥州に移って佐原義連に依った。その後、某の時に至って若狭と称し、会津野老沢（のらざわ）に住居した。名家の子孫ゆえに村の長を任じ、代々その職を世襲し絶えることはなかった。

父の伊佐衛門に男子が二人いた。⁽⁹⁾ 先生はその二番目である。生まれながらにして智恵深く、三歳で文字を習得するようになった。先生は喜んで麻の実を集め、それを並べ算盤を作つて算数を学習したという。人々は神童と注目した。

成人して憤然と発奮し、「どうしてこの私に、百姓と同じように農具をとつて一生田畑を耕し、老いさらばえてこの僻地に骨を埋めずめることなどできようぞ！」と言ひ、ついに草鞋をはき脚絆をつけ、笈わきを荷つて江戸に來つたのである。

先生は、典葉頭今大路西岡公に師事して医を究め、その秘旨を授かつた。はじめは大番師の青山公に仕えたが間もなく辞去し、各地を遊學して関西を觀光し、再び江戸に戻つて仮り住まいした。学・術ともにますます精達し、治療を請う患者は日々にその数夥しく、名声は一時に轟いたのである。多くの名士とも交際をもつた。再び仕えて白河侯（松平定信）に奉仕したが、その信任はすこぶる厚かつた。

先生の性質は直実剛介そのもので、學問上取るに足らぬものや納得できぬものは、面とむかつて批判し、放置しなかつた。

寛政一年（一七八九）、松平定信侯は関東補佐となり、老中首座となつた。寛政三年（一七九一）、先生は禄を返し、再度仕えることはなかつた。

平生の著述として、『素問』『靈樞』『難經』『傷寒論』『金匱要略』それぞれの注解書がある。ま

たその他雑著もいくつかある。

先生は加藤氏を娶つて、三男三女を儲けた。長男は三郎⁽¹²⁾といったが早死した。次男は遵養といい、父の業を継いで医者となつた。三男は自琢といい、目黒家を出て官医吉田氏の嗣子となつた。長女は松江侯の後宮に奉仕し、次女は官医須田氏に嫁ぎ、三女は官医杉枝氏に嫁いだ。⁽¹³⁾

先生は遺言して、「私のなきがらを故郷に持ち帰つて埋葬してもらつても、人手を煩わせるだけで、死人の私にとつても何ら益はない。どうか私の屍はこの江戸の地に葬つて欲しい」とおつしやつた。それゆえ、いま死の翌月、市谷月桂寺の墓地に埋葬したのである。私は先生とは最も古くから知己である。よつて墓碑銘の撰文を託された。ここに辞をもつて述べる所以である。

顯姓之俊 逃于東奥

姓を顯して後、東奥に逃る。

五百年間 于潜于伏

五百年の間、潜し伏す。

爰及先生 其興自躬

爰^ミに先生に及びて、其れ自ら^{ミカ}躬むるを興す。

古風為褊 直実為衷

古風を褊^{へん}（おもて）と為し、直実を衷^{ちゅう}（なか）と為す。

涉軒轅書 究烈山術

軒轅（黃帝）の書を涉し、烈山（神農）の術を究む。

救民沈痾 起人淹疾

民の沈痾を救い、人の淹^{エン}疾を起こす。

教授于館 白銀賜賞

館（医学館）に教授し、白銀にて賞を賜わる。

薦剡已達 奏謁于上

薦^{スイ}剡（人を薦める公牘）已に達し、上（將軍）に奏謁す。

魄竈黃水 名赫人間 魄（肉体）は黃泉に竈するも、名は人間に赫わる。

厥子厥孫 視此勿愆 厥の子、厥の孫、此れを視て愆つこと勿れ。

東都法眼侍医尚藥兼医学事 丹波元簡撰 嶋原盤瀬行言書

○

以上が多紀元簡の撰した目黒道琢墓碑銘文の現代語訳である。実に目黒道琢およびその家系を彷彿とさせる内容で、原文は多紀元簡の面目躍如たる名文で書かれている。訳文の拙さについては、原文を参照していただきたい。

目黒氏家系図の記載

次に目黒氏家系図中に記された道琢の部分を原文通り書き出してみよう。これは後述するように、筆者らが目黒道琢の子孫より得た新出の資料である（図13参照）。

○

尚忠 小字嘉謙 初メ豊全 重満二子

後遠祖重忠ノ諱ヲ用ヒ尚忠ト改ム

医ヲ業トシ道琢ト号ス母斎藤氏

元文四年己未三月十日生

初メ会津若松愛宕町保科家侍医平井喜哲ニ就キ医学ヲ学ヒ師命ニヨル平井氏ヲ冒シ後武彞江戸